

Title	リカアドオ派社会主義概論 (中)
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.3 (1924. 3) ,p.398(94)- 421(117)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240314-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある。「彼の廣汎なる著述の背景をなせるものは實に彼の連續斷つ事なき聖書研究の日課であつた」とはイー・テイ・クックの所言なるが誠に彼は純然たるバイブル・クリスチャンであつた。

一八五一年ラスキンが再びヴェニスに赴く以前の生活は斯くの如きものであつた。吾々は再び彼の建築論に戻らねばならぬ

(未完)

リカアドオ派社會主義概論 (中)

津田 誠 一

八

自傳に依れば John Gray は Derbyshire の Re-

National Commercial System”なる一論を脱稿したが、諫止する者有りて上梓を斷念した。然るに後日 Owen の諸著を味讀するに及びて其屢々自説と投合する節有るを知り、鶏肋乗つるに忍びず再び筐底の舊稿を抜抄し剗剗に附して世に問へるものが即ち“A Lecture on Human Happiness” 1825であつて、爾後久しきに亘り常に英國社會主義者の好伴侶たりしのみならず、亦米國費府に於て翻刻せられ此地の初期社會運動に貢献する所甚大であつた。Owen が其一本を米國より持歸り倫敦に於て再刻流布せしめたる事實は、同書聲價の一端を窺知せしむるに足る。是より先き 그레이 は Orbiston に於る Owen の共產部落を援助す可く一八二五年蘇格蘭に趣いたが、固より Owen との間に介在せる重要な諸點に關する見解の疎隔は、到底雄圖を試るの境にあらざるを悟りて惆悵失意の裡に此地を

Orbiston に於て小學教育を修了の後十四歳の春倫敦に志し一商館の職員となつたが、時宛も奈翁戰爭の餘波を受けたる社會的動搖を背景として都會の世相は混亂の極致に達し、忽ち少年の心を沈痛なる憂色に閉ざした。「何物か、間違つてゐる。何等かの絶大なる誤謬が此生動せる群衆中に存在する。就中自然の全秩序に背反せる觀あるは、人類の交易の行程である。蓋し神は其創造に當りて人の子を、吾人が隨所に看取するが如くに、専ら相互の障礙物たらしめんと企圖せらるにはあらざる可し」との懷疑が徐々に彼れの胸奥に胚胎した。爰に於てか 그레이 は商賈の傍ら經濟學の考究に潛心し、斯界の權威「國富論」第一卷を讀破して遂に現存經濟組織の窮極の缺陷は生産が需要の原因、たらずして需要の結果たる點に在りと悟りし、其所論を演述す可く「粗暴幼稚苦澁匡救す可からず」と自認する。「The

去り、慷慨の氣の迷る所 “A Word of Advice to Orbistonians,” 1826 の一篇を草して鳥合の衆を Owen の理想通りに訓練統卒するの至難なる所以を力説し、以て同志に對する分袂の辭とした。其後は蘇格蘭の他所に定住して操觚を業とし可成りの成功を收めたが、老來意氣漸く衰へて當年の革命的銳鋒復た見るに由無く、一八四八年に於ては其著 “The Social System,” 1831 の銘題に使用せる Social なる文字が、何等共產主義的意義を具現せるにあらざる事の辯疏を致せる程である。Foxwell は曰く「 그레이 の經歷の數奇なる、彼れを以て社會主義の列伍に算入するの失當なるを思はしむ。然も其著 “Lecture on Human Happiness” は確に社會主義的文獻の最も顯著なるものなり。其如何にして 그레이 の手に成れるやは余の常に理解に苦しむ所にして恰も平靜なる蒼穹に雷霆の一過せるに似たり」と

(Introduction to Menger's "Right to whole Produce of Labour," pp. xlviii-1). 乍併其初期の著作が社會主義的色調の熾烈なるは固より、晩年貨幣制度の改革を主張せるものに在りても其論旨を靜觀する時は著者自身の知覺せる以上に社會思想の傾向を含有せるは後段に論及するが如くである。

グレイの社會主義も亦た勞働價值説に基く勞働全收權の主張である。勞働は萬物を創造する「凡ゆる財産の基礎は勞働である。他に正當なる基礎は有り得なす」(Human Happiness, p. 34)。此基本思想に加ふるに彼れは、經濟學徒に依つて反覆力説せられたる、二個の現象を以てする。其一は社會構成原理としての交易の觀念、其二は生産階級と非生産階級との對立である。以爲らく、社會の發生は自然の現象である。蓋し自然は同胞相寄るの願望を人間に扶植せる故

である。同時にそれは幸福追求の願望をも賦與してゐる。果して然らば社會が爾く許多の害惡慘禍に苦惱せる原因如何。答へて曰く人と人との結合の原理が其適用を亂されし故である。社會生活を營まんとする人間の自然的願望を満足せしむる原理は交易である。「交易が、而して交易のみが、社會の基礎である。他の一切の制度は全く且つ専ら其上に築造せられてゐる」。此原理の正當なる適用は同一分量の勞働を交換するに在る。此基本原理にして遵守せられたりせば、社會は幸福に到達したであらう。然るに之を阻害し來れる禍根は即ち生産階級と非生産階級との對峙である。現存制度の下に於ては勞働者は其生産物の五分之四を略奪せられ、それは社會に對して何等の對價を提供せざる非生産階級に分配せられる。交換原理の冒瀆社會基礎の攪亂、是より始まると云ふのである。

但生産的勞働とは、グレイに於ては、唯だ田園工場及び鑛山に於る賃銀勞働をのみ意味するのである。社會の他の成員は勤勞を提供すること否とに従ひ有用無用の差別あれども、其非生産者たるの點に於ては即ち一で、等しく如上の賃銀勞働者の生産に懸る富に依り衣食せるものである。斯くてグレイは Colquhoun が其 "Wealth and Resources of the British Empire" 1814 に掲ぐる所の統計に準じて英國全社會を五十一種の職業別に分類し明細なる縮圖を作成せる後、結局富の生産の五分之一のみが其生産者の手に歸し爾餘五分之四は全然非生産階級の所得と化する計算を得、嘆じて曰く「事實一物をも支拂はざる富者が一切を收受し、事實一切を支拂ふ貧者が一物をも收受せず。余は凡ゆる廉直の士の明斷に問はん、斯かる社會の状態は之を維持せざる可からざる乎、そは凡ゆる公正の原理に背反

せるにはあらざる乎」(pp. 15-20, Beer: History of British Socialism, Vol. I, pp. 212-213)。彼れが諸種の不勞所得の糺彈に嚴なるは固より其所である。

九

地代に關するグレイの考察は其 "Human Happiness" の "Social System" の間に注目すべき變遷がある。前著に於ては彼れは土地私有權の否認に發足する。即ち土地は全人類の自然的相續物である。随つて「萬人平等の居住權がある」(p. 35)。然らば論理の歸趨する所必然土地共有の提唱を誘導す可き筈なるも、グレイに従へば此も亦た公正の觀念に合致しない。如何となれば既に再々論及せるが如くに共有と勞働全收權とは互に兩立し難き事情あるを以ていある。爰に於てか彼れは耕作者にのみ其自ら耕作に従ふ土地を限りて私有を許容す可しと云ふ、

平凡なる妥協案に到達した(p. 3637)。而して農業生産物を専ら労働の賜と看做す結果、グレイは經濟學上の地代の存在を否認し、随つて單なる所有の事實に依つて地代を抽出する地主階級の廢除を唱へ、自作農に基く小田圃制度の實現を希求した。然るに六箇年後に執筆せる“Social System”に於ては地味の肥瘠に依る收益の較差より地代の發生す可き所以を明白に確認し、「假に地主が地代を收受せざれば小作人之を收受す可し」(pp. 296-297)と斷定してゐる。換言すれば彼は尠くとも土地の特殊的なる生産力を認容せる點に於て、農業生産物を偏に労働にのみ基くとする最初の信念に多少の動搖を惹起した。爰に於てか耕作者自身が其耕作地の所産全部を領收するの權利有りと云ふ觀念も、必然一變しなければならぬ。此故に彼れの後期の諸著に於ては依然地主階級の廢除を主張

して歇まざるも、其論據は最早耕作者の労働に對する報償として是れに土地を與へんが爲と云ふにあらざして、土地は須らく國民共有の財産と爲し其耕作費と收穫とを一切の「麵麩を求むる人々」の間に分割するのが至當であると云ふのである (Lowenthal: The Ricardian Socialists, pp. 51-53)。固よ、彼は Henry George 一派の如く地代が社會的生產物なる所以を看取し爰に立脚して土地國有を提唱する程の進歩せる見解を保持せるにあらず、其主張も畢竟土地に對する萬人の抽象的權利觀念を根柢とするものなれども、尙且つ地代が専ら耕作者の労働のみに依據するにあらざるを悟りて翻然土地國有論に變遷せる思索の過程は甚だ興味有るものと云はねばならぬ。

利子も亦たグレイに従へば「何等の對價を提供せずして労働を横領する他の一形態である」。

非生産階級は勿論抗辯して云はん、余は余自身の財産に依り衣食せるものである。乍併「吾人は斷じて之を否定し反對に彼等は他人の財産に依り生活せりと斷ずるものである」。蓋し凡ゆる財産の基礎は労働か或は蓄積せられたる労働である。労働に基かざる財産は不正である。然らば十磅を貸與して十二磅を返還せしむる正當の理由那邊に在りや。「抑々夫の生産的労働者等は貨幣貸與者の所得として、年々彼等の勤勞の所産より控除せらるゝ其部分に對し何物を享受する乎。曰く何物も無し。然らば問はん、人は自己の労働の所産の所有者たる自然の權利を有する乎。若し然らずとせば何を以てか財産の基礎とす可き。若し然りとせば貨幣の使用に對して利子を徵收す可き正當の理由有る事無し」。要之現在の實相は次の如くに絶叫する人々に依つて満たされてゐる。「諸子よ余は生産物の豊

富なる貯藏を保持する故に最早労働せざる可し。乍併余は其如何なる部分をも消費せざる可し。但一物をも蓄積せざりし諸君は更に働け。然らば余は諸君が生産物を創造するや否や直に之を消費す可し」と。是れ一見何人も許容せざる奇怪の宣言に似たれども、事實公然行はれてゐると云ふのである (Human Happiness, pp. 34-38)。

更に權利の問題より離れて幸福の問題に轉向するも、グレイは自由競争の原則に立てる現存制度を極力擯斥するものである。以爲らく試に一國の全産業機關が其最高能力に於て活動するの自由を得たりと假定せよ。斯かる事情の下に於ては富の生産は現存生産力の程度か、若しくは各人諸種の欲望の飽滿に依つてのみ制限せられるであらう。此は自然的なる生産制限である。然るに現存の制度に於ては富を制限するも

のは生産力にもあらず消費欲にもあらず、實に競争其物である。今日生産は有效需要換言すれば利潤を提供する需要に依つて左右せられる。

此需要は社會各階級の享受する所得の多寡に倚頼する。而して此所得の分配を律するものは競争に外ならぬ。労働者の就職に關する競争は労働を低下し、企業家其他雇主間の競争は利潤を低下し地代亦た同断である。即ち固定所得を享受する者を除外すれば、各人の消費に供し得る所得隨つて又全國民の消費に供し得る所得が減少し、此國民所得の減少は必然有效需要の減少を意味し轉じて生産の制限となる。蓋し現存の社會状態に於ては、利潤を約束せざる限り一物と雖生産せられざるを以てある。かるが故に如何に衆民の欲望強烈に生産の能力絶大なりとするも、労働は労働と競争し資本は資本と競争し何等提携する所無きに於ては如上の缺陷は到

底之を救濟するの道無かる可しと (Beet: op. cit. Vol. I. pp. 214-215)。

以上縷述せる所をグレイ自身の挑戰的語調を以て要約すれば、「吾人は大略爰に現存社會が如何に在るかを明示せり。吾人は凡ゆる富の發生が人類の労働に基く所以、生産的階級は現在に於ては、嘗に彼等自身のみならず社會の凡ゆる非生産的成員を支持せる所以、自から手を下し土地を耕耘し若しくは土地生産物を人類生活の爲に準備充當する者のみが社會の生産的成員なる所以。其然らざる者は直接に其然る者の負擔となる所以、苟くも社會に裨益せんどの意志は見榮にすらも有せざる數多の浪費階級の人々は固より、總ての商人、製造業者等は其傭員と共に生産の指揮監督者若しくは單なる富の分配者にして悉く生産的労働に依り支持せらるゝ所以、且つ斯くの如き人々は唯だ労働を指揮監督

し其生産物を分配するに充分なる人數を限りてのみ有用なる所以を闡明するに努めたり。又吾人は人民の労働に依り年々創造せらるゝ富の分量より成る一國の眞の所得が、其生産者の手より主として地代家賃利子並に彼等の労働を廉價に購買して高價に賣却する結果たる利潤の爲に略奪せらるゝ所以、此労働に對する地代利子利潤の巨大なる課税は個人的競争の制度の存在する限り必然繼續す可き所以、新共產團體に於ては共同の福祉の爲に絶對的に必要なる非生産的職務に従事する者を除外すれば社會全員が生産的たる可き所以、而して何人も其労働に對して地代利子利潤を課税せらるゝ事無き所以を明示したり」と云ふに歸着する。此明快なる綱領の如何に社會主義的色彩に富めるかは何人も首肯する所であらう。是れ Foxwell をして「兎もあれ余はグレイを以て近世の闘争的挑戰的なる社

會主義の先驅者と看做さざる可からずと思惟するものである。彼れの小著は其獨創簡潔並に效果に於て、他の諸點に於ては一層尊重す可き精緻にして秩序立てるトムソンの著作よりも、寧ろ優れるものである。勿論グレイの信念はトムソンの如くに堅實ならず圓熟もせず、其人生に成功を遂げ若しくは經驗を積むに従つて痛く修正せられたる觀有れども、尙且つ此最初の著書の關與する限りに於ては、暴力の使用を否認せる以外、殆どマルクスに譲る所無し」と嘆賞せしめし所以である (Foxwell's Introduction to Men gers' "Right to whole Produce of Labour, pp. 111-112)。

吾人は固よりグレイの貧小を以てマルクスと同日に論ずるの奇矯に到底與する能はずとは云へ、尙此評言の前半には賛意を表するものである。然るにグレイは該著の擱筆に當りて、「余

吾人は固よりグレイの貧小を以てマルクスと同日に論ずるの奇矯に到底與する能はずとは云へ、尙此評言の前半には賛意を表するものである。然るにグレイは該著の擱筆に當りて、「余

は後日更に他の一書を以て是れが實施の曉には吾等の富に關する制限は唯だ生産能力の枯渴か若しくは各種欲望の飽満かに歸着す可き所の、國有資本の基礎に立つ別個の社會組織に就いて説明する所ある可し」と約束せるに拘らず遂に之を履行せざりしのみか、其後の諸著に於ては生産の關する範圍に於て全く社會主義的主張を拋棄し其考察を専ら公平なる交易組織の案出にのみ限局した。同時に其現存秩序を攻撃する論調に於ても亦た昔日の辛辣味無く、挑戰的罵言は跡を斷ち道德的熱情は冷却し去つて新たに現前せるは其勞働價值説と連繫せる貨幣制度の改革案であつた。

十

今彼れの後期の著作に屬する “The Social System,” 1831. “An Efficient Remedy for the Distress of Nations,” 1842. “The Currency

が悉く貫徹せらるゝとも現存の交易の形態にして依然革新せられざる以上は、何物の改善をも實現するを得ないであらう。然るに交易の媒介物は貨幣である。其用途は度量衡に等しく交易に當りて等價の授受を便利ならしむるに在る。故にそは交換す可き何物かを有する人々に取りて容易に取得し得るものならざる可からず。既に然る以上は金が此役目に適せざるは明瞭である。蓋し市場に於て取引せらるゝ貨物の百中十九までは、金よりも生産し易く取得し易しと云ふも敢て過言ならざる故である。此理由を以て貨幣は金を基礎とする時は、交易を阻碍し需要を妨遏し隨つて生産を抑制する。銀行券も亦た保證準備を必要とするが故に硬貨同様の支障がある。爰に於てか國民は不斷に貨幣の缺乏に苦しみ、貨幣の職責は本來何人にも何時にても如何なる價值を有する如何なる貨物にても、彼

Question,” 1847 並に “Lectures on the Nature and the Use of Money,” 1848 等に從ひて其精要を概括するに次の如くである。以爲らく、人類に價值ある總ての貨物を生産するは勞働であると同時に、各個人が自己の勞働に依つて生産し得ざる種々なる貨物を享受するは交易に基くのである。交易無くんば人は所詮最も低劣なる野蠻狀態より向上するを得なかつたであらう。然るに現在の交易原理の運用は誤つてゐる。それは文明國に瀰漫せる巨大なる害惡の巢窟であつて、勤勞に酬ゆるに饑餓を以てし刻苦に酬ゆるに落膽を以てし而して善を爲さんと欲する統治者の最上の努力に酬ゆるに紛糾と失敗を以てするものである。斯かる交易の組織こそ社會問題に關する觀念に混亂を惹起し、議院改革案、普通選舉論、自由貿易論、減稅論其他種々なる輿論の絶叫を見たる根源である。假令如上の諸要求

れが其代りに取得せん事を欲する商品と交換するを得せしむるに在るに拘らず、常に交換を待てる貨物の額よりも不足すると云ふ不都合なる現象を生ずるのである。然らば如何なる貨幣が能く此目的に妥ふを得る乎。

グレイに従へば貨幣は當然單なる領收書即ち貨幣の所持人が富の國民的貯藏に對して特定の價值を寄與したる證據、若しくは彼れが富の蓄積に貢獻したる他人より同一價值に對する權利を獲得したりと云ふ證據と爲さねばならぬ。領收書の用途は其所持人をして欲する時欲する形に於て先に寄與せる價值を再び收受せしむるに在る。而して貨幣はそれ自身内在的價值を具へてはならぬ。此提案の實施には國立銀行を設立して紙幣發行の獨占權を賦與し、更に一切の生産物は工場又は製作所より國立倉庫に送致せられ、此處では直接に消費せられたる原料勞働量

を査定し、是に地代、利子、減價償却、課税等の費用を支辨する爲に商業會議所の決定に基く一定率利潤を附加して生産物の小賣價格とする。一方是等國立倉庫は國立銀行代理人の監督下に立ち、代理人は納入生産物の領收書として國立銀行發行の紙幣を交附し此紙幣を以て任意隨時に他の等價の在庫品と交換せしめる。爰に於てか交易の公平圓滑期して俟つ可しと云ふのである (Beer: op. cit. Vol. I. pp. 216-218)。

思ふに如上の勞働紙幣の觀念には凡ゆる商品をして貨幣と同一視するの錯誤、換言すれば各商品中に包含せらるゝ孤立せる個々の人の勞働を以て直に社會的勞働と看做す獨斷を存すると共に、グレイ自身は之を以て單なる資本主義經濟組織の圏内に於る一改革と思惟せるに拘らず、其理論を徹底的に發展せしむれば必然社會主義に歸趨す可き顯著なる傾向を具有せるもの

に依りてのみ普遍的社會勞働たるの實を表現し得るのである。換言すれば商品生産に於る勞働は、個々の勞働の普遍的移動に依つてのみ社會的勞働と化するのである。然るにグレイは商品中に包含せられたる勞働時間を以て直接の社會的勞働時間なりと看做し、是れが爲に該勞働時間を以て共通の勞働時間換言すれば直接に聯合せる個々人の勞働時間なりと假想するに至つた。然し斯かる條件の下に於ては實際上金銀の如き特殊なる商品は普遍的勞働時間の具現として他種商品に對立する能はず、交換價值は價格に轉化するを得ない。他方に於て使用價值は交換價值と化する能はず、生産物も商品となる能はず随つて資本主義生産組織の根柢自身が破滅す可き道理である。乍併此はグレイの眞意にあらず、彼れは生産物は商品として生産せざる可からず然も商品として交換す可からずと云ふの

である。マルクスは其「經濟學批判」に於て此點に論及して曰く、「勞働時間を以て貨幣の直接的尺度單位と爲す學說を系統的に披瀝せる嚆矢はジョン・グレイである——乍併勞働時間が價値の固有の尺度なりとせば、何故に是に伴ひて他の外的尺度の存在を必要とする乎。何故交換價值は價格に發展し行く乎。何故總ての商品は交換價值の特種なる體現中に轉換せらるゝ、一の排他的商品即ち貨幣を以て其價値を測定する乎。這般の問題こそグレイの當然解決せざる可からざる所のものであつた。然るに彼れは之を解決する代りに、諸商品は相互に直接的に社會的勞働の生産物として交渉を保ち得るものと想像した。乍併諸商品は唯だ各自あるがまゝの能力に應じてのみ相互に交渉を保ち得るのである。諸商品は獨立し孤立せる個人勞働の直接の生産物であつて、偏に私的交換の行程に於る其移動

である。彼れは此敬虔なる願望の成就を國立銀行に委任した。社會は一方國立銀行を介して私的交換の諸條件とは全然獨立せる個人を作り、然も他方に於ては其個人をして私的交換の基礎に立てる生産を繼續せしめんとするのである。されど論理は必然彼れに迫つて單に商品交換の結果たる貨幣制度の改革のみを企圖せる素志を裏切り、資本主義的生產條件を續々否定するに至らしめた。彼れが「總ての國の事業は國有資本にて行はざる可からず」と云ひ (Social System, p. 171)、又「土地は國有財産に變化せざる可からず」 (Ibid. p. 298) と云へるが如き比々皆然りである。而して彼れの國立銀行を仔細に検討する時は、そは實に一方に於て商品を領收し他方に於て致されたる勞働に對し證券を交附するのみならず、實に生産其物に干渉する所以を發見するであらう。彼れが其最終の著作たる

“Lectures on Money”に於て所謂勞働紙幣が純然たる資本主義圏内の改革に過ぎざる旨を云爲せるは、求めて一層明白なる矛盾に陥れるものと云はねばならぬ。

畢竟凡ゆる商品は貨幣なりと云ふグレイの學説は彼れの不完全なる随つて誤れる商品の分析に基くものである。「勞働貨幣」「國立銀行」「國立倉庫」を有機的に結合せんとするは、獨斷を普遍的法則化せんとする夢想に過ぎぬ。商品は貨幣なりと云ふ獨斷換言すれば商品中に包含せらるゝ個人個人の勞働を以て直に社會的勞働と看做す獨斷は、銀行が商品を信用し是に準じて業務を行ふと云ふ單純なる事實に依つて、自づから眞實性を失つてゐる。此場合破産が實際的批評家の役目を演ずるは確實である。グレイの著書並にグレイの腦裡に潜在したる所のものは、實は勞働貨幣は貨幣を、又貨幣と共に交換

價值を、又交換價值と共に商品を、最後に商品と共に資本主義的生産形態を脱却せんとする、敬虔なる願望に對する熾烈なる經濟上の主張に外ならざりし事は、一部はグレイ以前に一部はグレイ以後に英國社會主義者の手に依りて闡明せられたのである」と (Marx: Zur Kritik der Politischen Ökonomie, 1859, SS. 61-64)。

一八三二年より一八三四年に亘る倫敦に於るOwenの勞働交換銀行の成立と失敗は、如上のマルクスの評言を事實の上に裏書せるものである。同時に吾人はグレイ自身の主觀的態度より律する時は、前期の著作は社會主義的論調歴然たり後期の著作は單に資本主義圏内の一改革に躊躇すと雖、之を客觀的に省察する時は其後期に於ても尙所謂國家社會主義の主唱と共通なる思想を抱懷せる事實を首肯しなければならぬ。而して前掲マルクスの所言に現はれたる英國社

會主義者の中グレイ以前と云ふは既に述べたるキリアム・トムソンを暗示し、グレイ以後と稱するは即ち次に述べんと欲するジョン・フランシス・ブレエを意味するものである。

十一

“Labour's Wrongs and Labour's Remedy,” 1839の著者ブレエに關しては吾人は僅に Foxwellを通じて彼れが抄たる一印刷工に過ぎざりしを知り且つ G. J. Holyoake を介して其小著が社會運動者間に喧傳せられしを知る外 (History of Co-operation, Vol. I. p. 224) 何等經歷の聞ゆるもの無しと雖、其書に依りて其人を觀るに彼れは獨學能く Owen, Gray, Thompson 等の協同主義的教義を咀嚼すると共に又 Hodgskin 流の反資本主義的信條にも啓發を受けて當時の世相を靜觀し、無産者階級解放運動の數次の蹉跌に深憂の色有り、遂に Chartist 運動の勃興を

目視するに及び敢然其哲學並に經濟學上の蘊蓄を傾倒して勞働階級に對し彼等の窮境を離脱する唯一の方途は、生産分配交換の相互協同に在る所以を指示するに努めしものである。ブレエの基本思想は自然の三原理に立脚する。第一凡ゆる人間は其身體構造壽命に於て平等である。偶々人性に不平等有るは概して境遇の異同並に人爲的制度の所産たる不平等に起因する。第二生命の持續に必要な資たる衣食住は吾人の周圍の隨所に存在すれども、勞働が是れに關與するまでは彼等は自然に無價値なるか若しくは獲得するを得ない。かるが故に人命は衣食住の相應の給附無くんば支持するを得ず且つ是等は勞働無くんば獲得する能はざるに依り、何人も當然勞働せざる可からず。第三凡ゆる人間の性質並に欲望は本來均等なるが故に彼等の權利は平等ならざる可からず。而して人類の生

存は同一事故に左右せらるゝが故に、凡ゆる活動の舞臺にして且つ凡ゆる富の源泉たる土地は其全住民の共有財産たらざる可からず。約言すれば人類の均齊、權利義務の平等、土地共有は是れ自然の法則である云ふのである (Labour's Wrongs, pp. 31-34, Peer: History of British Socialism, Vol. I. pp. 237-238)。

然るにブレエに従へば現存社會が此自然法則の實現を阻止せる窮極の原因は、私有財産制度を基礎とする經濟組織の缺陷に在る。蓋し經濟的平等を隨伴せざる眞の政治的平等は有り得ない。亞米利加合衆國の經驗は這個の消息を明示するものである。此共和國に於ても社會は依然富者と貧者資本家と生産者に分裂し、且つ後者は前者の權力に屈從してゐる。此は政體の如何を問はず萬國に共通なる事實である (Labour's Wrongs, p. 19)。而して所有の不平等の存在す

る所に於ては必ず權利義務の不平等が存在する。政治家が立法の事に當るや富者を富者とし貧者を貧者とし只管傳統的精神に終始するのみにして、其何故に或る人々は富裕にして他の人々は貧困なりや更に或る階級は幾世代に亘る刻苦を以てしても毫も貧困の度を減せざるに他の階級は幾世代に亘る奢侈淫佚を以てしても毫も富裕の度を減せざるは何故なるかを顧慮する所がない。政治家は殆ど常に労働者に懲罰するに政治的改革政治的救済の希求を以てするも、然も是等懲罰者の多數は労働者階級に所屬せず富者と結托して彼等の利益に反對する。労働者階級が屢々政治運動に期待して屢々失望せるは固より其所である。畢竟一切諸惡の根源は所有の不平等に遡及す可く他の禍因は悉く皮相的であると云ふのである。爰に於てか彼れは現存制度の經濟學的批判を以て其所説の論證を試る。

謂ふ所の經濟學とは所詮資本家階級の自己辯護の要具に過ぎぬとブレエは斷定する。即ち個人主義經濟學徒に従へば労働者階級の現在の不遇は「敵も味方も直接如何ともす可からざる事情に依つて然有らしめられるのである」(p. 17)。「即ち以爲らく一國に於て生産の目的に供用し得可き資本又は貨幣の分量は一定してゐる。斯く此貨幣量一定せるが故に若し之を以て特定數の労働者を一週二十志にて雇傭するを得るとせば其倍數を雇傭し得るには一週十志、其四倍數を雇傭し得るには一週五志に於てでなければならぬ。爰に於てか必然労働者の員數愈々多大ならば彼等に取つて益々不利である。随つて此労働と資本との不調和に對する唯一の匡救策は労働者の或る數が市場の外に去る外は無いと。然し假令貨幣の缺乏を以て是等の最も不本意なる遊民の失職の眞因なりと許容するも、尙

彼等を餓死又は移送する以外に匡救の道は無いであらう乎」。爰に於てブレエは之を救ふ合理的手段は労働を資本の限度にまで低下せしむるにあらずして貨幣の増發に依り資本を労働の要求額まで増加するに在りと爲し同時に労働過剰と云ふが如きは富の過剰が需要を消滅するか又は原料が缺乏するにあらざる限り實在する事無し。却つて「吾人は人手多く原料多く然も生産少しと云ふ三重の矛盾に直面してゐるのである」と云つてゐる (pp. 103-105)。

正統派經濟學の勞銀論に關する前掲ブレエの解釋は決して嚴正なる勞銀基金説を開陳せるにあらずして、單に需要供給を以て労働人口と全資本或は一層適確に云へば「資本則貨幣」との關係なりと思惟せるものである。此は正統派の學説を曲解せるものなりと同時に夫れ自體誤謬なるは喋々を要しない。而して彼れが「資本則

貨幣」の觀念を抱懐せるは其貨幣に關する論說の明示する所である。曰く「貨幣は資本の代表物である。貨幣の價值有る所以は是れが爲であつて何等其固有の性質に基くものではない。蓋し貨幣を通じて人々は其所有する眞の資本の或は大なる部分或は少なる部分を任意に利用するを得る故である」(P. 140)。現在に於ては紙幣は金貨を基礎とし金貨は眞の資本を代表すれども、實際に於ては金貨の介在を必要としない(pp. 143-144)。若しも一國の富の全額を代表するに充分なる紙幣の發行を見たりとせば、彼等を働かしむるに必要な貨幣の缺乏の爲に困惑せる無数の貧窮なる遊民は救濟せられるであらう。原料機械労働其他凡ゆる生産の要素は豊富に存在し且又必需品並に奢侈品に對する欲求も横溢せるに拘らず獨り流通手段たる貨幣の缺乏せるが爲に産業の停滯は生ずるのであると(中略)

145)。思ふにグレイと云ひブレエと云ひ只管通貨の缺乏を嘆するは畢竟奈翁戦後の産業不振通貨收縮の反映に外ならざるも、兩者共に眼前の事象に拘泥し貨幣數量説の片鱗をだも考慮する能はざりしものと云はねばならぬ。

轉じて吾人の間はんと欲するは既に彼れにして労働過剰は實在せずと云ふ以上、何物を以て勞銀低廉の原因と看做し又如何なる制度を以て勞銀決定の理想とするかの一事である。是に關するブレエの解答は財産私有並に労働に對する報償方法の不公平が眞實の禍根なるを以て、等量の労働に對し平等の勞銀を與へよと云ふに歸着する。爰に平等の勞銀とは凡ゆる職業に於る凡ゆる人間の同一時間の労働に對して同額の勞銀支辨を意味する事は次の言辭に依つて間接に推量し得らる。曰く「労働は労働に外ならぬ。労働以上のものでも無く労働以下のものでもな

い。且つ職業には貴賤無く假令凡ゆる種類の労働が廣く社會に同等に價值有りと認められざるにせよ、斯かる労働の不平等は報償の不平等の證據とはなり得ない」(p. 144)。「労働が同種なると否かを問はず又其性質結果目的の如何を問はず報償は常に労働に比例しなければならぬ」(p. 63)。蓋し個人的效用と社會的效用とを如何に調和す可きやと云ふ古き價值論と共通なる難關はブレエの無視せる所である。

如上の見解は當然不勞所得の攻撃に轉向する。即ち曰く「資本家又は雇主の一切の蓄積は労働者階級若しくは雇人の支拂はれざる労働に由來する。此手段に依つて一人が富裕となる裏面には必ず多數を貧困に委ぬるを條件とする」(p. 56)。此は總て不平等なる交換に依つて行は

する價值に過ぎぬ。然も此價值すらも以前労働より搾取せられしものである。蓋し資本家は非生産者なるが故に交換す可き何物をも所有し得ざるを以て、ある。所詮「資本家は労働者の一週日の労働に對して其前週に彼れより搾取せる富の一部分を與ふるものに外ならぬ」。富者を益々富裕に貧者を益々貧困ならしむるは此交換の不平等であつて、人々の假想するが如く肉體的及び精神的の不平等ではない」(pp. 48-49)。平等なる交換組織に在りては價格は専ら生産に費されたる労働に基くが故に、利子又は利潤は存在し得ないと云ふのである。然らば彼れは此不正不平等なる現状を脱却するに如何なる手段を指示する乎。

十二

れる。労働者は常に資本家に供するに全一日の労働を以てし受くる所は僅々半日の労働に相當

ブレエが理想實現の手段として議會を通じての民衆運動に多大の効果を期待せざる可きは既

に述べたる所に依つて推知し得られるが、同時に彼れは暴力の闘争をも極力否認する。以爲らく邪惡を省察し是れが匡正手段を考慮するに當

つて勞働階級は彼等の敵とする所は人にあらず制度である。個人としての資本家若しくは資本其物には罪無き事を忘却してはならない。凡そ「性質に關しては人は環境の決定する所に從ひ如何様にも或は何物にも變轉し得る資格を具有する。かるが故に人は如何に殘忍なる暴君貪婪なる資本家又は卑屈なる奴隸と雖其境遇の所産なる以上、是れに非難憎惡を加ふるは不正である」(P. 114)。又曰く「吾人の據る可き適當の方途は暴力にあらず理性である。強制にあらず自覺である。横領にあらず購買である。「訓練無く節制無き暴動にあらずして團結力の組織的適用である」。民衆革命の奏效には自覺が常に暴力に先行せねばならぬ。如何となれば暴力は假

令建設するとも之を持続する能はざる故である」と (P. 214, 215)。爰に於てか彼れは二個の自案を提出する。

抑々ブレエの窮極の理想は交換の平等と勞働の普遍とが併立せる社會、私的利益に代るに共同的利益を以てせる社會、結局 Owen 流の協同的共產部落に歸趨す可き社會である。彼れは之を以て人力の構成し得る最上の社會と看做すものなれども又思ふに此は一朝一夕の間に樹立し得可きものではない。蓋し人は環境の子なる以上吾人は誰しも多少現存制度の發散する腐敗と非違に感染浸潤せる故である。即ち一方に於て最も完全なる共產制度の成功には人類性情の變化を根本的に必要とすると同時に、他方に於て現存制度は此必要なる性情の變化を實現するに何等の便宜なる環境を提示せずとすれば、ブレエに從へば次の如き二個の方法の孰れかを採

擇せられざる限り必然現状打破の不可能なるは明白である。其一新制度を試みんと欲する者は須らく莫大なる資本の蓄積を擁して、新制度の創造せる優秀なる環境が其効果を發揮するに至る時まで、舊制度に涵養せられし精神の齎らす障礙を克服するを得る餘裕を持たねばならぬ。其二是若し然らずんば或る種の準備的階段仲介的道程を發見し、暫時現在の愚蒙錯誤を具せざるまゝにて此假寓に駐歩し而して共產平等の制度に不可缺なる諸性情を體得したる後に始めて是れに進む可しと云ふのである (Beat. op. cit. Vol. I. p. 241)。

思ふに如上の二提案中前者は新大陸の Harmony を始め Owen 並に其使徒が各地に企劃せる共產團體失敗の因を、資力の缺乏と是に伴ふ人心の離反に歸する觀念に出でたりと覺し、更に後者は集産主義の一次的楷梯に依つて

國家の死滅を俟たんと欲するマルキンズムを想起せしむるものあり、ブレエが徒に精神改造萬能論を呼號する徒輩と其選を異にするを見る可し。然らば彼れは其所謂完全なる社會に到る準備的行程として如何なる制度を考案せりやと云ふに、そは次の如き方法に依る株式會社風の團體組織である。即ち社會は唯一の勞働者階級より成る。彼等は精神的並に筋肉的勞働者を包括し無數の株式會社團體に統合せられ、何人も勞働に従事し其報償は勞働時間に比例する。是等の團體は土地及び一國の生産資本を所有すると同時に國立銀行發行の二十億磅に上る紙幣を所有し、相互に且普遍的に富の生産分配に當り又平等の大原則に立ちに其勞働並に其生産物を交換する。此廣汎なる勞働聯合は稍々近世株式會社の性質に類似し幾多の生活必需品の賣店を有し、是等の生産物は無數の小商人の手を經る

代りに大市場又は商品陳列所の方法に依て分配せられ、各商品は過剰の爲に暴落する事も無く投機の爲に暴騰する事も無く國內孰れの地方に於ても卸價に依つて取得せられる。生産運輸其他一般の公共的業務は中央地方の種々なる會議所に依つて管理せられ其評議員は各團體の公選に依る。他方に於て國立銀行は紙幣を發行し、之を各團體の支配人に對し其團員の數又は彼等の職業の性質に應じて交附する。此貨幣を以て總ての個人及び團體は現存の商取引の原理に準じて商品を購入し交換する。而して人に直接課税するか若しくは商品に定率の課税を爲す事に依り、管理費に必要な基金は容易に得られる。貨幣の發行額は常に現實に有效なる資本の限界内に止まり、又常に勞働に對する支拂に供す可く用意せられてゐる。勞働も亦た此資本の普遍的代表物に對し何ん時たりとも其力を發

Labour, p. 1xx)。吾人は固よりブレエの企圖を其儘に實現に適すとは到底思考し能はざるも、尙且つ彼れの思索が其先人の腹案よりも合理的なる事を承認せねばならぬ。

更に彼れは現存制度に培はれたる人間の頭腦を以て徒に當來社會の細葉を憶測せん事の無意義なるを論じて云ふ、是れ以上將來の世相を精密巨細に叙述するは人力の企及し能はざる所である。蓋し人間の知識は自己又は他人の經驗を通じて享受せらるゝものなるが故に、新たなる環境に置かれし場合人が如何なる感情を抱き如何なる行爲に出づるかは適確に豫斷し得ざるを以てある。吾人の僅に爲し得る所は過去現在の事實に徴して行爲並に行爲の誘因に關する諸原理を考察するに在る。經驗を以て原理と結び實地を以て學理と結ぶ事に依り、吾人は詮索しつゝある結果に近きものを得る事が出来る。其

揮する。斯くて貨幣は勞働を保證し勞働は商品の生産を保證する。爰に於てか生産、蓄積、分配、消費は自然に調和し混亂恐慌失職貧困を排除すると云ふのである (Beer: op. cit. Vol. I. pp. 242-243)。

Foxwell は如上の計劃を以て Owen 並に Thompson の純共產主義よりは一層實際的なりと斷じて曰く、「それは生産物の私有と共に生産力の共有を認め以て私有財産に伴ふ刺戟と利害共通に伴ふ公正さを交々併有するものである。産業組織の單位としての彼れの團體は其先驅者等の自己免許の團體よりは遙に實際的である。洵に吾人にして其範圍の國家的に且つ其勞銀分配法の稍々共產主義的なる生産組合の聯合組織を想像し得るとせば、それはブレエの企圖せりと覺しき所を了解するに庶幾からん」と (Introduction to Menger's "Right to whole Produce of

産主義者の努力は斯かる性質のものである。彼等は假令共產社會の下に於て人民の採擇す可き制度の技藝を一々指摘し得ざるにせよ、其根本の諸原理其輪廓の概要を示し以て現存社會の諸秩序と對比し之を批判するの基準たらしむるものであると。

最後に吾人の看過す可からざるはブレエが資本主義經濟組織の自然的崩潰を明白に豫言せる一事である。曰く乍併社會組織の變革を準備しつゝあるは共產主義者にあらず又他の何人でもない。「現在の危機は事物の發展に伴ふ自然の機運に外ならぬ。それは永遠より永遠に亘り進展して歇まざる無常の大海の巨濤の一動に外ならぬ。それは希臘羅馬の洗練せる文化が半野蠻主義に退歩したる時にすら尙進展しつゝあつたのである。それは佛蘭西大革命勃發の時既に襲來しつゝあつたのである。而して今此眼前の瞬間に於

て凡ゆる性質凡ゆる種類の政治的並に社會的諸制度をば破壊更新しつゝあるのである。現在の危機は單に地方的現象にあらず、それは國土八種宗教に依つて限局せらるゝにあらず、其活動の範圍は全宇宙である。且つ其直接の光景は如何ともあれ一層燦爛幸福なる時代の黎明は輝き初めた。心の光は權力時代 Age of Might の暗黒を照破し權利の時代 Age of Right を迎へんとしてゐる」云 (Beer: op. cit. Vol. I. pp. 243-244)。

斯くの如くに觀じ來れば思索に深淺の差こそあれ、ブレエの小著が能くマルクスの大著に先驅して是と共通若しくは類似の要旨を包容せる事を偉とせねばならぬ。而してマルクスは明にブレエの著を熟知してゐた Foxwell は此點に關し辛辣なる諷刺を弄して曰く、「此書を繕く者は何人もそれが、カアル・マルクスに先んじ

るも亦た實に此「資本論」である。獨逸に於ても同じくブレエが當時知らるゝ所少なりしは、マルクスに取つて幸運であつた」云 (Foxwell's Introduction to Menger's "Right to whole Produce of Labour," pp. lxx-lxxi)。吾人は此言必ずしも矯激に失するの故を以て無碍に笑殺し去る可きにはあらざるを思ふものである。

乍併他方に於て兩者の隔離も亦た明白である。瑣末の比較は姑く措くもブレエが人類の平等性若しくは完全性を認容し、理性の力を過信する所に尙舊來の空想的分子を脱却し得ざる證據歴然たるものがある。畢竟吾人は一般にリカアドオ派社會主義の人々を以て所謂空想的社會主義より所謂科學的社會主義に推移する道程に立てりと述べたが、就中ブレエの場合に於て特に其然るを覺ゆるものである。

更に一面より觀照する時は Beer の評言の如

て其最も重要な特質なりと看做されてゐる多數の思想を明白に披瀝せる事を認めざるを得ない。マルクスが此書に大なる感激を受けたるは疑ふ餘地無き所である。彼れは其 Production 非難を目的とせる一八四七年の「哲學の貧困」に於ては九頁に亘りてブレエを引用し、彼れの論文は佛蘭西に於て知らるゝ所少きも過去現在及び未來に於る Production の總ての著作の鎖鑰を握れる注目すべき文献であると述べてゐる (pp. 50-62)。然るに一八五九年漸く彼れ自身の學說を展開し始むるに及びては、ブレエに關説せる箇所は僅に一脚註に於て彼れの姓名を擧ぐるに止まる (Zur Kritik der Politischen Ökonomie, S. 64)。加之其引用書目十有六頁に上る一八六七年の「資本論」に於ては彼れの姓名すら表はれてゐない。而して夙に一八三九年ブレエが爾く力強く説述したる利潤論をマルクスが展開せ

くに彼れの小著は Owen 主義の最後の且つ最も力強き表現であると云へる。幸福、自然權、性質決定者としての環境、資本主義的生産、勞働價值説、協同的企業、交換の社會化、政治に對する經濟の優先、總て是等の諸思想は渾然一卷中に明示せられてゐる (Beer op. cit. Vol. I. pp. 236-237)。此點に於て彼れは概して既述のトムソン並にグレイと同一の軌道に立ち更に數歩を進めしものと云はねばならぬ。獨り異彩を放てるは最後に論せんと欲する Thomas Hodgskin である。

(未完)